

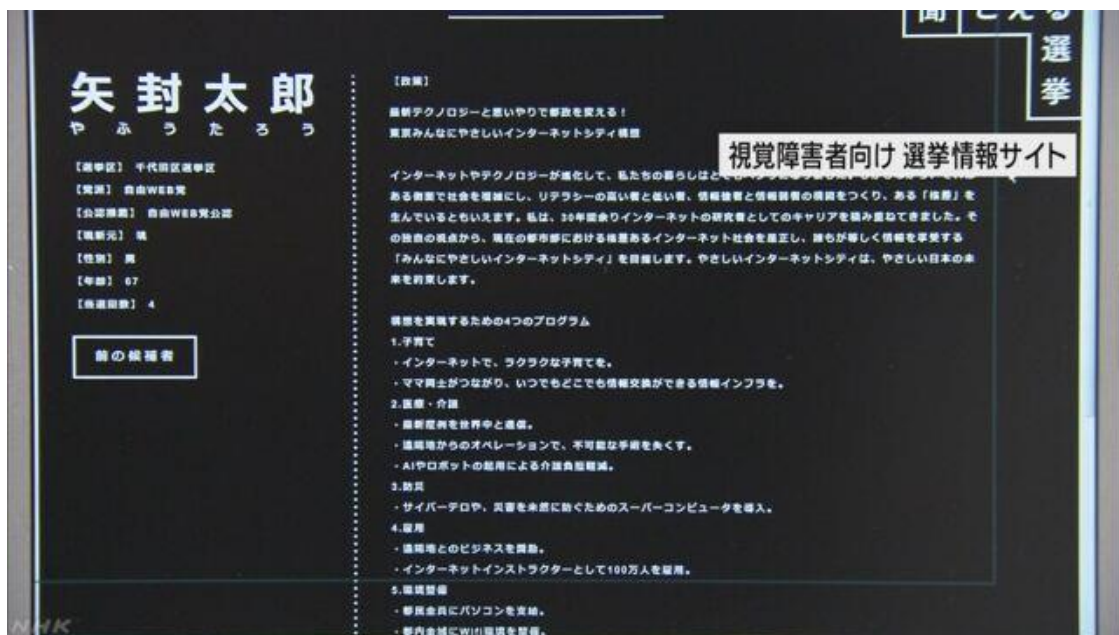


大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3731 号 2017.6.22 発行

ヤフー 視覚障害者に対応した選挙の特設サイト公開へ NHK ニュース 2017年6月22日



東京都議会議員選挙が23日告示されます。IT大手のヤフーは、視覚障害者がインターネット上で選挙の情報に十分にアクセスできない現状を変えようと、視覚障害者に対応した特設サイトを作り、22日から公開することになりました。

特設サイトのトップページをクリックすると、真っ黒な画面が現れます。「何もメッセージが出ないと思われた方へ」という右隅の文字をクリックすると、その理由が示されます。

総務省の調査によりますと、視覚障害者の9割がインターネットを利用し、文字を音声にして読み上げるソフトなどを使って情報を得ていますが、候補者の訴えや経歴を記した選挙公報は、ホームページ上では文書全体を画像化した「PDFファイル」で掲載されているため、文字を識別できず、視覚障害者はそのままでは内容を知ることはできません。

東京都選挙管理委員会によりますと、選挙公報の改ざんを防ぐためPDFファイルで「そのまま」掲載することを求めた総務省の通知を受けて、こうした対応を取っているということで、サイトではこうした現状が説明されています。

サイトでは、都議会議員選挙の告示後に掲載される各候補者の選挙公報を文字化し、音声読み上げソフトによって内容を知ることができるようにするという事です。

サイトの開発に当たったヤフーの鈴木宏一さんは「視覚障害者を取り巻く問題を知ってもらいたいと考えました。インターネットを使って情報の格差を乗り越える一助になればと思っています」と話しています。

都や国の対応

東京都選挙管理委員会は、候補者から提出された経歴や訴えなどを記した原稿をもとに選挙公報としてまとめて各世帯に配布しているほか、選挙管理委員会のホームページにも掲載しています。

しかし、ネット上の選挙公報は文書全体を画像化したPDFファイルの形式で掲載され、音声の呼び上げソフトが文字を識別できないため、視覚障害者はそのままでは書かれている内容を知ることはできません。

総務省は5年前（平成24年）、選挙公報が改ざんされるのを防ぐため、ホームページ上にはPDFファイルで「そのまま」掲載することなどを求める通知を全国の自治体に出しました。

これを受けて、東京都選挙管理委員会は「選挙公報には写真やイラストなども掲載されているため、文字だけを音声化すると候補者間の公平性が保たれないおそれがある」として、画像化したPDFファイルを掲載しているということです。

都選挙管理委員会は、選挙公報を点字にしたり、テープに録音して配ったりして視覚障害者にきめ細かく対応しているとしていますが、「総務省の見解や法的な根拠なしに、独自に選挙の啓発活動を行うことには限界がある」と説明しています。

専門家「対応の見直し必要」

国連の障害者権利委員に日本人として初めて選ばれ、障害者の政策に詳しい、静岡県立大学教授でみずからも全盲の石川准さんは「日本は公共の建物や交通機関のバリアフリーなどは頑張っていると思うが、情報へのアクセスに関する法制度や政策は立ち後れている」と指摘しています。そのうえで、石川さんは「日本も批准している障害者権利条約では、政治への参加を権利として保障することを認めているため、国は視覚障害者の選挙公報へのアクセスを可能にするべきだ」と述べ、これまでの対応を見直す必要があるという考えを示しています。

13歳が描いた絵に国内外から称賛 デザイン採用され商品化、次は個展

福井新聞 2017年6月22日



個展を目標に絵の創作に励む吉崎莉菜さん＝福井県鯖江市の自宅
吉崎莉菜さんの絵が採用されたスマートフォンケース

福井県鯖江市

市の吉崎莉菜さん（13）が動物を題材に描いた幻想的なアクリル画が、障がい者アート協会（埼玉県）運営の投稿サイトを通して国内外から反響を呼んでいる。都内の通販サイト業者が商品化したスマートフォン（スマホ）ケースのデザインにも採用され、自信を深めた現在は初の個展開催を目指し創作に励んでいる。

莉菜さんは、母幸子さん（43）が自宅で開いているチョークアート教室「アルコパレノ」の講師をしていることもあり、幼い頃から絵を描くことが好きだった。

2015年に発達障害があると分かり、「好きな絵をのびのびと描き、才能を伸ばしてあげたい」と幸子さん。自宅リビングの一角にはキャンバスとイーゼルを置き、ミニアトリエとした。莉菜さんはさらに夢中になり、特別支援学級に通う以外のほとんどの時間を、筆を手にスケッチブックやキャンバスに向き合っている。

昨年、障害者の創作活動などを支援する同協会運営の絵画投稿サイト「アートの輪」が



あることを知った。グラデーシヨンの星空の下、オオカミの影が浮かび上がって見える絵や、鹿のシルエットの中に森が広がる絵などを「RINA」の名で投稿したところ、国内外から「芸術的すごい!」「才能があるよ」といった称賛のコメントが寄せられた。

今年3月、同協会を通し、もの作りに取り組む障害者を支援している通販サイト業者「BTOK」(東京)から商品化の話が持ち掛けられた。投稿したオオカミの絵などがスマホケースのデザインに採用され、既にサイト内で販売されている。

大型作品にも挑戦しており、昨年9月には障害者や特別な支援を必要とする児童生徒を対象にしたアート作品展「きらりアート展」に40号の作品を応募し大賞に輝いている。個展は来年の開催を目標にしており、投稿サイトでの反響や商品化を励みに一段と創作に励んでいる。

幸子さんは「親としてこの子の人生に創作活動だけを選択させるのが良いのか迷いもあったけど、今は迷いは晴れている。実際の作品をぜひ見ていただき、たくさんの人に莉菜の作品を好きになっていただきたい」と話している。

愛知) 産学官で災害時の医療福祉情報システム開発へ 豊平森

災害救急医療・福祉情報システムのイメージ



朝日新聞 2017年6月22日

高齢者や障害者などの災害弱者を福祉面で早期から支援できる態勢を作ろうと、藤田保健衛生大と日本福祉大、半田市、インフォコム(本社・東京)の産学官4者が、「災害救急医療・福祉情報システム」の共同研究を始めた。大地震などの災害発生直後から医療、福祉、行政の各関係者が避難所や重症患者数などの被災状況を瞬時に情報共有する。来年4月の本格運用を目指す。

システムは、小中学校などの指定避難所や、社会福祉施設などの福祉避難所の状況や重症者数などの情報を、災害発生直後からインターネット経由でパソコンやスマートフォンなどの端末を使って共有できるようにする。

共同研究リーダーの平川昭彦・藤田保健衛生大教授(災害・外傷外科)は「学会などでは、福祉支援は(発生直後の)急性期

ではなく、ある程度落ち着いてからとされてきた」と説明。だが、阪神・淡路大震災や熊本地震の災害医療に携わった経験から、「高齢者や妊婦、小さい子ども、障害者は、災害時に放置されがち。要支援者を悪化させないため、急性期から福祉支援が必要」と訴える。

高次脳機能障害「抱え込まずに相談して」 さいたま市が電話窓口

産経新聞 2017年6月22日

さいたま市は、後天的な脳障害を原因として記憶障害などを引き起こす高次脳機能障害の電話相談窓口を市障害者更生相談センター(同市大宮区)内に設置し、本人やその家族らを支援している。高次脳機能障害に特化した電話相談窓口設置は県内市町村で初の試みという。同センターの担当者は「症状は千差万別で、正しい理解と適切な支援が必要。抱え込まずに利用してほしい」と呼びかけている。(宮野佳幸)

同市などによると、高次脳機能障害は交通事故や脳梗塞、低酸素脳症などで脳に損傷を受け、後天的に記憶障害や社会的行動障害が引き起こされる。もの覚えが悪くなったり怒りっぽくなったりといった症状が現れる。

本人に自覚がないことも多く、周囲からも障害の有無が分かりづらいのが特徴。見た目には障害があることが分からないため、「見えない障害」とも呼ばれる。

同センターによると、東京都が平成20年に発表した調査結果を元にした推計では、市内には約5千人の高次脳機能障害者がいるという。

同市は「どこに相談していいのかわからない」などの声に応え、5日から同センター内に相談窓口を設置。言語聴覚士や精神保健福祉士ら専門職員が就労支援などの相談に対応する。

運用初日の5日には「交通事故の影響で障害を抱え、以前より疲れやすくなった」という悩みを持つ男性の母親からの相談を受けた。就労支援や利用可能な福祉制度などについての問い合わせがあり、後日面談を行うことになった。

相談業務に当たる言語聴覚士、土田弦さん(32)は「相談者は現在だけでなく過去から何年も悩みを抱えているので、話を聞いて心のケアもできるようにしている。気軽に電話をしてもらい、行き場のない現状を変えたい」と話す。

相談窓口は休日、祝日、年末年始を除く毎月第1、3月曜午前9時半から11時半まで。問い合わせは(電)048・646・3125かFAX048・646・3163。

児童が障害者と交流深める 太鼓演奏など体験／豊南小で福祉村キャラバン隊

東日新聞 2017年6月22日

社会福祉法人さわらび会の施設利用者らは21日、豊橋市豊南小学校を訪れ、障害者への理解・交流を深めるための活動「福祉村キャラバン隊」を開催した。

活動には、障害福祉サービス事業所「明日香」、障害者支援施設「あかね荘」「珠藻荘」の利用者らと、5、6年生が参加した。

「明日香」の余暇グループ「さわらび太鼓」による勇壮な太鼓の演奏を聞いた後、映像を見ながら施設内の活動内容の説明を受けた。

その後、グループごとに分かれ、太鼓演奏や目隠し・車いす体験、絵画・絵織りの実演見学などを行った。

太鼓演奏を行った河合亜弥音さん(6年)は「太鼓をたたくことができ楽しかった。みんなと一緒に大きな音が出た」と感想を話した。

活動は1993年に開始。ここ4年は活動が途絶えていたが、今年から再スタートした。今回で、94回目の開催となった。

<いのちの響き> 筋ジスに負けず就労(上)

中日新聞 2017年6月21日

勤務先から貸与されたパソコンで画像を加工する河本圭亮さん
＝名古屋市内の自宅で

電動車いすに座って机に向かう。パソコンに届いていた勤務先からのメールを開くと「業務連絡。画像の切り出しをお願いします」。今日の業務内容を指示する内容だ。腕はうまく動かせないが、くるくると手首をひねってマウスを操り、輪郭に沿ってクリックしていくと、キャラクターの背景が消えていく。

この春、愛知県立港特別支援学校(名古屋市港区)の商業科を卒業した河本圭亮(けいすけ)さん(18)の仕事場は自宅。筋力が次第に衰える筋ジストロフィーで、



自力では上半身も動かすににくい。作業中はほとんど同じ姿勢が続くため、仕事を終えてベッドに横になると背中がこわばっているのを実感する。でも、「働けるなんて思っていなかった。仕事ができることが、めっちゃうれしいです」と、顔いっぱい笑みを浮かべる。

勤務先は、企業のフリーペーパーやホームページの作成などを請け負う一般社団法人「福祉情報技術サポートセンター」（同市北区）。障害がある生徒が新卒で、在宅で正規雇用契約を結ぶのは同校では初めて。県内でも「とても珍しい」（県教委）という。

当面の勤務は一日三時間を週三日。体力の不安だけでなく、自宅にこもりきりにならないようデイサービスに通い、障害者スポーツ「ボッチャ」の練習に行くためだ。時間が短いため社会保険には入れないが、無期雇用の正職員で有給休暇やボーナスがもらえ、結婚すれば配偶者手当などの対象になる。今は時給千円ほどだが、センターの伊藤雅行代表（53）は「技術が上がれば、給料はもちろんアップします」と言う。

筋ジストロフィーと分かったのは三歳のころ。小学四年のとき、地元の学校から特別支援学校へ。そのころは電動アシスト付きの車いすだったが、数年後に電動車いすに。「僕なんか働けない。将来は障害者施設に通うしかないんだろうな」。働いて賃金を得る暮らしは無縁だろうと思っていた。

転機は高等部一年の秋。同じ筋ジストロフィーの二学年先輩が企業に就職することが決まった。そう聞いて、学校の廊下で進路指導担当の河合健太郎教諭（46）を呼び止めた。「先生、僕も働きたいです」。河合さんは、その気持ちが分かり「任せておけ」と即答。しかし、当てはなかった。

最大の壁はトイレに介助が必要なこと。河合さんは年間千社以上を回る。障害者に配慮した事業所もあるが、トイレのサポートは難しく、意欲や学力があっても就労の扉はなかなか開かれない。先輩は自力で用が足せる分、河本さんより就職しやすかった。

「在宅就労ならできるはず」。漠然とそう考えながら企業回りをしていたある日、ハローワークの職員から紹介されたのが伊藤さんだ。伊藤さんは、障害者の就労に関心があり、同センターには在宅就労の健常者も数人いた。河本さんとも直接話し、採用を決めた。

河本さんは『働きたい』と言ったけれど、実際は難しいと思っていた。河合先生たちには感謝です。生まれて初めてもらった給料は三万円余り。メールで届いた給与明細に、じんときた。試用期間が終わる七月には「デザイナー」と書かれた名刺をもらう。

「自分には働くのは無理」。以前は、そう思っていたけれど、今は目標がある。企業のロゴマークやホームページを一人で作り上げ、肩書きに負けない仕事をする。そして「次は僕が後輩の指針になる」。パソコンに向かう表情は、引き締まって見えた。（諏訪慧）

<いのちの響き> 筋ジスに負けず就労（下）

中日新聞 2017年6月22日



実習に臨む生徒たちを見守る河合さん（右端）と伊藤さん（右から2人目）＝名古屋市港区の港特別支援学校で

カチカチ、カチ。白いワイシャツやポロシャツを着た男女七人が、パソコンのキーボードを打ち続ける。誤った欄に記入された郵便番号を正しく打ち直したり、全角と半角の混在する文字をそろえたり。就職に備えて、企業が顧客に送るダイレクトメールの住所録を整理するのを想定した実習だ。

七人は、愛知県立港特別支援学校（名古屋市港区）高等部の一～三年生。脳性まひや筋ジストロフィーがあり、腕が思うように上がらなかったり、いすに座り続けると疲れてしまったりする。苦労しながらも、作業をクリアするごとに自信に満ちた表情を見せた。

実習は五日間あり、高等部の六十七人が就職や施設での生活など卒業後の進路を見据え

て活動を選択。パソコン実習は、在宅で働くことを見越した内容だ。後ろでは、同校の進路指導担当の河合健太郎教諭（４６）と、一般社団法人「福祉情報技術サポートセンター」（名古屋市北区）の伊藤雅行代表（５３）が見守り、途中で手が止まった生徒に声を掛けた。

同校で在宅勤務に備えた実習を始めたのは昨年から。その成果は、この春卒業した筋ジストロフィーの河本圭亮（けいすけ）さん（１８）の就職に早速表れた。四月から伊藤さんが代表を務める同センターに勤務し、在宅でウェブデザイナーとして働いている河本さんは現役の生徒にとって身近な目標だ。

一年生の白鳥聖弥（せいや）さん（１５）も筋ジストロフィーで、一人ではトイレが不自由。「収入を得て、できるだけ自力で生活したい。働くとしたら、家族の支援が受けられる自宅しかないと思います」と話す。

重い障害があっても就労意欲が高い人は少なくない。しかし、身の回りのことを独力でこなすのは難しく、卒業後は障害者施設に通うことになり、目標を持たずに次第に意欲が低下してしまう人もいる。

一定以上の障害者を雇うよう国が企業などに義務付ける「法定雇用率」も壁になる。週に二十時間以上働かないと、雇用に数えられない。障害のある人が働きやすい環境を整えるよう企業に促す狙いがあるが、体力の不安から二十時間を満たせない人にとっては逆風になる。

伊藤さんは、もともとシステムエンジニア。二十年ほど前、耳の聞こえない人にインターネットの使い方を教えたのを機に関心を持ち、チラシなどの印刷工場障害者を雇うようになった。しかし、三カ月もたたずに辞める人が多く、「慣れない環境は難しいのかも。自宅で働くのが向いているのかな」と感じた。

伊藤さんと進路指導の河合さんが知り合ったのは、二〇一五年秋。河合さんが伊藤さんの事務所を訪ね「障害がある生徒を在宅就労させたい」と相談すると、即座に「やってみましょう」と応じてくれた。

昨年初めて実施した在宅就労の実習。目を輝かせて作業する河本さんに、伊藤さんは「真面目で、若いだけにのみ込みも早い。働く場がないなんて、もったいない」と感じた。河本さんは「IT技術の進歩でいろいろな働き方ができるようになってきた。まだ少ないけれど、障害があっても在宅などで働ける世の中になるといいな」と話す。

健常者と同じ戦力として雇うので、法定雇用率を満たすかどうかは関係ない。「技術を身に付け、もっと稼げるようにさせたい」。河本さんに期待しつつ、実習に取り組む可能性にあふれた七人を見つめる。（諏訪慧）

夜間侵入者から命どう守る 花巻の老人ホームで訓練 岩手日報 2017年6月22日



パイプいすを使い不審者役と距離を保つなど緊急時の対応を学んだ参加者

花巻市東和町東晴山の特別養護老人ホーム東和荘（伊藤芳江施設長、入所93人）は21日、花巻署（小田島洋憲署長）と連携し、夜間の不審者侵入を想定した訓練を行った。相模原市の知的障害者施設で昨年7月、19人が刺殺された事件を教訓に初めて企画。「職員の少ない夜間に何ができるのか」を検証する貴重な場となった。

訓練は管理棟で行い、入所者は対象とせず職員約20人が参加。職員が最も少ない4人勤務の夜間に、不審者役が「以前勤務していた者だ。財布を捜している」と言いながら施設内に侵入した。男性職員が訪問理由を聞きながら入所者の部屋から遠ざける形で対応。別の男性職員が警察に通報したが、不審者がナイフを取り出したため2人がかりで対

応し、他の同僚への連絡が遅くなった。

東和荘は本館、新館、別館の3棟あり、短期入所者を含め計103人が生活する。

埼玉) JR東社員が特別支援学校生徒からサービス学ぶ 朝日新聞 2017年6月22日
駅に見立てた校舎内で、目が不自由な生徒を誘導案内するJR東日本の社員=川越市笠幡



JR東日本の駅員や車掌ら社員36人が21日、川越市にある県立特別支援学校・埴保己一学園を訪れ、目が不自由な生徒たちと交流し、視覚障害者を誘導案内する実技を学んだ。同社のサービス向上研修で、視覚障害者がホームから転落する事故が起きたことなどをうけ、初めて企画した。

まず社員同士が2人1組になり、学園の教員の指導で、交代で目隠しをして相手に誘導してもらい、目が見えない状態で歩く体験をした。午後は校舎内を駅に見立て、廊下や階段を歩いてホームまで案内する練習で、社員たちは腕に生徒をつかまらせ、「ここを左に曲がります」などとこまめに声をかけたり、周囲に気を配ったりしながら、歩調を合わせて歩いた。

社員たちは「生徒が意外に速く歩くので、ゆっくり行けば良いというものでもないとわかった」「目隠しすると人にぶつかるのが怖い。視覚障害者が何を不自由に思うのか実感できた」。生徒からは「小さい段差も教えてくれて良かった」との評価を得ていた。(西堀岳路)

大外刈りで脳損傷、車いすの中1 母「一緒に死のうか」 編集委員・中小路徹

朝日新聞 2017年6月21日

車いす生活の大城陽向君(大城香奈江さん提供)

スポーツの事故で重大な障害を負った少年の暮らしは壮絶だった。2014年3月、沖縄県豊見城(とみぐすく)市にある町道場の柔道教室での練習中に急性硬膜下血腫となった男子の母親は、「指導者には子どもを守る知識を備える責任がある」と、再発防止を訴える。

大阪府岸和田市に住む中学1年、大城陽向(ひなた)君(13)は車いす生活で特別支援学校に通う。脳を損傷し、左手が動かず、左目の視野が極めて狭い。リハビリを通じ、



会話はできるようになったが、歩行は短い距離に限られ、食事も介助が必要だ。2年前からてんかんの発作が頻発。倒れると自力で起き上がれず、母の香奈江さん(32)は目が離せない。

香奈江さんは事故後、陽向君の将来のことで意見が食い違った夫と離婚して岸和田市の実家に戻り、両親の助けを得ながら陽向君と長女(6)、次男(4)を育てる。「陽向は生きてはいるけど、あったはずのものがすべてなくなった。半分、殺されたと思っています」。世話を追われ、次男が歩けるようになったことをしばらく知らなかった。



事故は1分間交互に相手を投げ続ける稽古で起こった。小学3年の陽向君が組んだのは5年生の男子。体重差は大きくなかったが、柔道を始めて半年だった陽向君とは、経験、実力とも差があった。

香奈江さんが道場長から受けた説明によると、1本目の稽古が終わり、陽向君が泣いた。「頭を打ったのか」と指導者が聞くと、陽向君が「痛い」とうなずいたものの、相手の道着をつかんで練習を続ける意思を示したために再開。2本目、投げられた後に自分が投げる番になるとふらふらと歩き出し、倒れた。

陽向君が受けた技は、大外刈り。過去の事件事例が多いことから、全日本柔道連盟が受け身の能力などを慎重に見極めて受けさせるよう、指導者に注意を促している技だった。

香奈江さんは病院の医師から、陽向君の頭には打撲の痕がなかったと聞いた。「頭を打ったのではなく、強く揺さぶられたことで静脈が破れる加速損傷が起きて急性硬膜下血腫を発症し、さらに再び衝撃を受けて悪化したのだろう」と説明された。

道場長は朝日新聞の取材に「(陽向君は)大外刈りの受け身はしっかりできていたが、実力差のある組み合わせにしたことを反省している。事故後は、学年と柔道歴を考慮して、慎重に組ませている。全柔連の指導者講習会に出るようにしている」と話した。

鏡に映る自らの姿を見て、陽向君が涙を流していたことがあった。香奈江さんが思わず「一緒に死のうか」と言ったこともある。

柔道では、陽向君の事故後の15、16年にも全国の中高の部活動中の事故で計3人が亡くなり、計3人が意識不明になっている。香奈江さんは言う。「このままでは何のためにこの子がけがをしたのか、わからない。末端の指導者が知識を持ち、教訓として生かしてもらいたい」

販売現場の課題意見交換 九州地方紙若手店主

佐賀新聞 2017年06月22日



九州地方紙販売店連合会青年部佐賀大会で意見交換をする参加者ら＝佐賀市のホテルニューオータニ佐賀

九州地方紙の若手販売店主らが集う「第70回九州地方紙販売店連合会青年部佐賀大会」が21日、佐賀市のホテルニューオータニ佐賀で開かれた。「地域に生きる ブランドを進化させる」をテーマに共通課題などについて意見交換した。

佐賀、長崎、熊本日日、大分合同、宮崎日日、南日本の6紙の若手店主や後継者ら約80人が参加。佐賀新聞販売店会青年部「若登会」の荒木

勝巳会長は「地域とつながりがあるのが地方紙の強み。地域が育てた新聞というブランド力がある」とあいさつした。

会合では若年層の読者にPRするためSNSの活用方法などについて意見交換した。また、各地域で共通して深刻な配達員不足が課題となっており、その対策として、引きこもりの若者を就労支援するサポートステーションとの連携や、障害のある人や定年退職した人の受け入れなどが挙げられた。

記念講演では、14代今泉今右衛門さんが「今右衛門の色鍋島」と題して話した。月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

